

食品化学新聞



関心高まる認知症予防素材

平均寿命・健康寿命ともに世界トップに根拠につながる治療法は確立しておらず、可能な限り早期に認知症とその予備軍と考えられるMCIを発見し、適切な生活介入が必要とする。認知症と糖化ストレス（終末糖化産物）との関連に

レベルで健康な高齢者が増加するわが国で、最近関心が高まるのが認知症対策など加齢に伴う脳の健康維持だ。先月開催された「ifia/HFE JAPAN2018」でも脳の健康を主眼とした機能性素材の展示やエビデンスが多く紹介され、認知症セミナーは盛況を博した。さらに複数の研究者・有識者らがアルツハイマー病の研究知見とともにその予防としての食品成分利用の有効性を訴え、特にMCI（軽度認知障害）対策は今後の焦点になりそうだ。

5月18日に東京ビッグサイト会議棟で開催された「第15回糖化ストレス研究会」では、愛媛大学附属病院抗加齢予防センターの伊賀瀬道也教授がアルツハイマーと糖

化ストレスをテーマに講演。伊賀瀬氏は認知症について、現在までに根治につながる治療法は確立しておらず、可能な限り早期に認知症とその予備軍と考えられるMCIを発見し、適切な生活介入が必要とする。認知症と糖化ストレス（終末糖化産物）との関連に

「MCI」対策が今後の焦点に

また、22日のUCLAゲイリー・W・スモール教授の来日講演でも、アルツハイマー対策にはMCI段階での早期介入が重要とし、セラバリューズが開発した秋ウコン由来のクルクミン「セラクルミン」の18カ月摂取で認知機能改善をヒトで確認したことを紹介。研究はMCIを示す高齢健常者460名を対象に二重盲検比較で実施し、セラクルミン90mg又はプラセボを1日2回摂取し、6カ月ごとに言語記憶、視覚記憶、注意力、抑うつ感について検査を実施した。その結果、摂取群では各項目とも試験前後で有意に改善し、プラセボ群との比較や脳の画像診断からも有意差が認められた。

このほか、17日にifia/HFE会場で開催されたTie2・リンパ・血管研究会ミニセッションでは、大阪大学の高倉伸幸教授の講演で血管と脳との関係に

れ、認知症の原因のうち、脳の血流減と酸化ストレスについては健康食品の範疇でフォロワーが可能と述べ、毛細血管内皮のTie2受容体を活性化するとヒトやマウスモデルなどの有用性に期待を示した。

現在国内の認知症患者460万人は、2025年には700万人に達すると予測されるなか、自身に達すると予測される際、身体が健康なまま認知症が悪化することへの強い不安を覚える人も多い。機能性表示食品では認知機能の一部としての記憶力維持などをヘルスクレームとする機能性関与成分はイチョウ葉抽出物を始め、DHA・EPA、プラズマローゲン、P

Sなど幅を広げる。今後はノビリンやルテインなど、さらなる素材開発や研究の推進に期待が寄せられる。